

# 認知症高齢者グループホームにおける 入居者とスタッフのかかわりの様態に関する研究

石井研究室 開山友美子  
庄司 恵子

キーワード：認知症高齢者 グループホーム  
かかわり 空間タイプ

## 1. 研究の背景と目的

認知症高齢者のグループホームとは、要介護認定を受けた認知症の高齢者が少数でスタッフと共同生活を営みながら、認知症の症状をやわらげることを目的とした介護サービスである。認知症ケアにおいては、いかに「かかわるか」、いかに「寄り添うか」がきわめて重要であり、その個別的なかかわりが安心感を与え、症状の緩和につながるかとされている。それが最も効果的に実現できる場がグループホームだとされている。

本研究では、そのグループホームにおいてスタッフと入居者のかかわりを観察し、そのかかわりの様態を明らかにすることを目的としている。また調査対象施設は、共用空間が畳で構成された和風ユニットと、フローリングで構成された洋風ユニットの2タイプあるため、空間タイプによる違いも分析する。

## 2. 調査の方法

各ユニットに1人の調査員が入り、共用空間での入居者とスタッフのかかわりに着目して8:00～19:00までの11時間連続的に調査した。かかわりが見られたら、その“行為内容”、“場所”、“人数”、“時間”を平面図上に記録した。06年10月16日と17日の二日間調査を行った。

## 3. 調査対象施設の概要

調査対象施設は石川県小松市にある認知症の高齢者向けグループホームである。概要は表1の通りである。和風と洋風の2ユニットで構成されており、定員は各9名の計18名である。入居者の平均年齢は87歳となっている。介護度は平均2.3であり、介護度1から5までの入居者がいた。和風ユニットは畳敷き、洋風ユニットはフローリング仕様となっている(図1)

表1 調査対象施設の概要

所在地	石川県小松市
敷地面積	1040.79m <sup>2</sup>
延床面積	516.03m <sup>2</sup>
空間構成	家具持込自由の個室の居室、台所・食堂・居間からなる共同空間、便所、職員室、中庭で構成されている。
平均スタッフ数	昼間3人(8:00～19:00) 夜間1人(19:00～8:00)
入居者	定員 18名(9名×2ユニット) 平均年齢 87歳(70～94歳) 平均介護度 2.3(1～5)

2006年10月時点

## 4. 調査結果と考察

### 4-1. かかわりの形と事例

今回調査から得られた入居者とスタッフのかかわりの場面を分析・集計し、そのかかわりの形を「移動」、「会話」、「手渡す」、「側にいる」、「介助」、「作業」の6種類に分類した。各項における具体的な行為の内訳を表2に示す。「会話」には挨拶や一言だけで終わるものから数十分に及ぶものがあり、「介助」は主に食事介助と生活介助に分けられる。また行為は「台所」、「食堂」、「居間」の空間別に分析した。以下図1に各ユニットにおける代表的なかかわりの

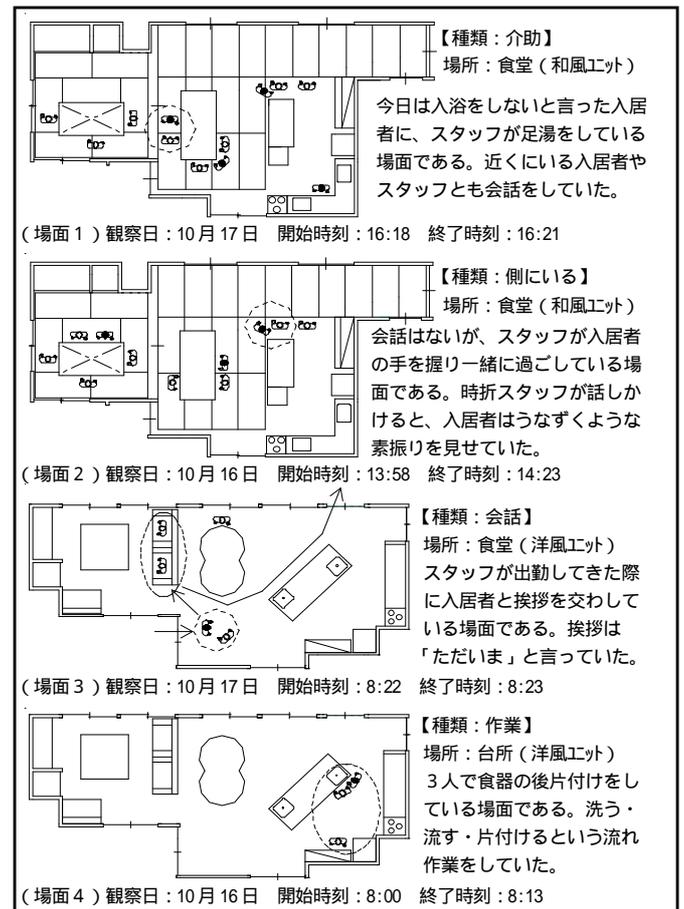


図1 かかわりの場面 (○：入居者、●：スタッフ)

表2 種類別行為の内訳

移動	移動	側にいる	側にいる	作業	調理
会話	あいさつ	介助	食事介助	調理	食事前準備
手渡す	食事		顔を洗う	作業	食器片付け
	ご飯を持ってくる		髪を乾かす		おやつ準備
	お茶を持ってくる		足湯をする		手洗い
	コーヒーを持ってくる		爪を切る		洗濯物をたたむ
	ジュースを持ってくる		シップをはる		ごみ集めを行う
	おやつを持ってくる		目薬をしてあげる		ソファを干しに行く
	薬を持ってくる		着替えを手伝う		紙箱作り
	皿を持ってくる		介護		新聞まとめ
					いもづる作業

場面をあげる。

#### 4-2. かかわりの密度

今回観察されたかかわりの場面の数は、一日平均で和風ユニットが133、洋風ユニットが166であった。調査にあたった11時間（660分）に対するかかわりのあった総時間は一日平均で和風ユニットが390分、洋風ユニットが433分であった。またこれらを一（660分）で割った値を「かかわりの密度」とすると、その密度は和風ユニットが59%、洋風ユニットが66%となった。

入居者とスタッフのかかわりのあった時間を場所別に示したものが図5（和風ユニットの1日目）になる。

#### 4-3. かかわりの特徴

グループホームでの入居者とスタッフのかかわりを“時間”、“種類”、“場所”、“人数”の視点からみていく。

まず“時間”についてみると、「11-20分」のかかわりも少しみられるものの、「1-10分」のかかわりが92%を占めている。その中でも1分程度のかかわりが多くを占めることも明らかになっており、短時間のかかわりが頻繁に行われていることが分かる。

次に“種類”についてみると、「会話」が61%と最も多く、次いで「移動」14%、「手渡す」10%、「作業」8%となっている。また「介助」と「側にいる」は5%以下と少なくなっている。グループホームでは日常生活を支えながらのケアが行われていることが分かる。

次に“場所”についてみると、「食堂」でのかかわりが61%を占め、次いで「居間」22%、「台所」17%となっている。このグループホームでは「食堂」が入居者とスタッフのかかわりの中心となっていることが明らかになった。

“人数”について見ると、「入居者人数」1人の割合が79%、「スタッフ人数」1人の割合が93%を占めていた。ともに1人の割合が大半を占めており、一対一の個別的なかがわりが中心となっていることが示されており、細やかなケアが行われている実態が明らかになった。

#### 4-4. 空間タイプの相違による比較考察

調査にあたったグループホームは、共用空間が豊でできている和風ユニットとフローリング使用の洋風ユニットの

2タイプのユニットにより構成されている。また和風ユニットの流し台が壁面に取り付けられているのに対し、洋風ユニットでは対面式のアイランド型キッチンを使用しているなどの違いがある。

今回、この流し台の位置から入居者とスタッフのかかわりに違いがみられた。対面式のアイランド型キッチンは調理をしていても食堂・居間の様子分かるため、そこから声かけを含めて何らかのかかわりを持つことができる。その結果が場所別におけるかかわりの割合に顕著に現れた図6-6、図6-7。和風ユニットの台所でのかがわりが全体の4%であるのに対し、対面式のアイランド型キッチンを持つ洋風ユニットでは27%にも及ぶ。スタッフの滞在の拠点となるキッチンの配置形態とかかわりとの関係が浮かび上がった。

また、和風ユニットの畳という空間だけにみられたかがわりがあった。スタッフは会話など直接的なかがわりを持たなくても、入居者の側に座り、手を握ったりしながら一緒に過ごす「寄り添う」行為が畳の空間では観察された。畳の空間は家具に規定されることなくどこでも座れば行為が発生しうる。フローリングでは家具のある場所しかかがわり行為も発生しにくく、畳空間との違いも明らかになった。

#### 5. まとめ

今回の調査を通して、グループホームにおける入居者とスタッフのかかわりの様態を明らかにすることができた。今回調査したグループホームでは様々なかがわりがみられた。多くは短時間のもので、個別的なかがわりであった。大規模施設におけるユニットケアなどに比べ、豊かなスタッフ配置を持つ（日中で最大3名と、ユニットケアと比較して1名多い）利点を生かして、きめ細やかな一人ひとりへの質の高いケアが可能となっている実態が明らかになった。

また空間のつくりの違いが、かがわりの発生と、その形に少なからず影響を及ぼしていることも明らかになった。



図5 和風ユニットでみられた関わりの発生（10月16日）（黒い部分でかがわりが発生していることを示している）

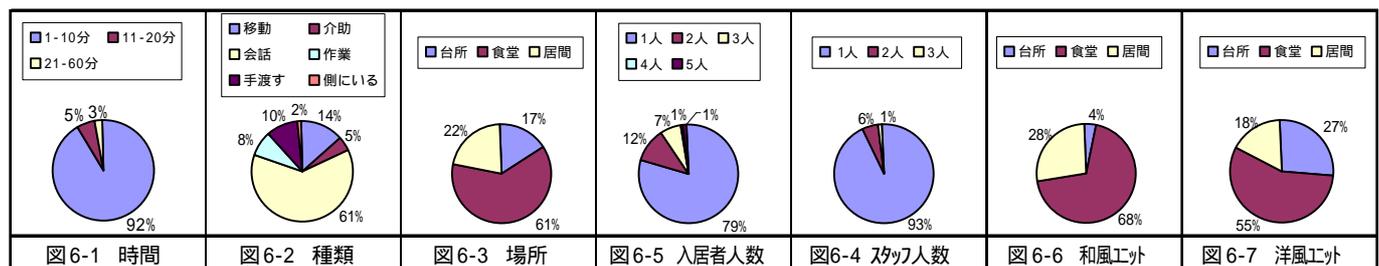


図6 かかわりの特徴